



誠のあゆみ、未来へつなぐ 岩手医科大学 創立120周年

創立120周年記念ロゴマーク・スローガン
(2017年に創立120周年を迎えます)

国内医科大学 視察と討論の会を終えて

医学教育学講座 教授 佐藤 洋一



平成26年9月18日（木）と19日（金）の2日間、公益財団法人医学教育振興財団と岩手医科大学医学部の共催により、「第34回国内医科大学視察と討論の会」が開催されました。これは、当番校が医学教育に関する取組みを発表し、それについて全国から集った医系大学の教育担当責任者が議論をするものです。今年度は、全国から約100名の関係者と本学の教員・学生約60名が参加いたしました。

私を含め、この会に参加したことのある先生方は、「これは引き受けたら大変なことになるだろう」という感慨を漏らされます。それというのも、当番大学の教育内容を、教育に関して目の肥えた全国の先生の前で披露することになりますので、きちんと教育をしているのか、あるいは手を抜いているのかが白日の下にさらされるからです。本学の使命は誠の精神を具有する地域医療人の育成にあります。そのため、新キャンパスでは他学部との連携を図る教育を始めておりますし、地域の医療現場での研修に関しては様々な取組みを20年以上にわたっておこなって参りました。また、卒後のキャリアパスを考えた社会人大学院制度も全国に先駆けて制度整備をおこないました。論理的思考力を醸成する教育改革も始めたところです。こうした事柄は誇っ

て良い一方、様々な課題も内在しております。良いところだけを呈示しても、慧眼の士から見るとすぐさま問題点を指摘されることは容易に想像がつかしました。そこで小林医学部長はじめ主だった方々が「岩手医科大学医学教育の特徴とその課題を取り繕うことなく、素のままを見ていただく」という方針をたて、それに沿って資料作りに臨みました。

第1日目は、大堀記念講堂での講演からスタートしました。文部科学省の高等教育局医学教育課課長の寺門氏から、特別講演Ⅰとして「医学教育の現状と課題」が述べられました。主要な話題は、基本的な診療能力の確実な習得とそれらの評価を、各大学で推し進めて欲しい、ということでした。これは国際的な医学教育質保証の一環であり、全国医学部長病院長会議の方針とも一致するという紹介でした。医師としての基本的な資質も呈示されましたが、豊かな人間性やコミュニケーション能力あるいは地域医療の向上と研究への志向等々、現行の医師国家試験では問われることのないものが多かったのですが、これらはまさしく本学の特徴として取り上げた

1) 地域医療教育 2) 多職種連携教育 3) 論理的思考向上と合致するものでありました。

第1日目

・特別講演Ⅰ

「医学教育の現状と課題」

寺門 成真

（文部科学省高等教育局医学教育課長）

・講演1

「地域医療人育成に向けて1」

— 学部教育の成果と課題

（全人教育と態度・技能の向上）—

平 英一

（薬理学講座情報伝達医学分野 教授）

・講演2

「地域医療人育成に向けて2」

— 卒後教育における大学の役割 —

黒坂 大次郎

（眼科学講座 教授）

・講演3

「医療系総合大学としての多職種連携教育の試み」

佐藤 洋一

（医学教育学講座 教授）

・講演4

「教育技法の改善

（認知領域のStudy skill低下に対して）」

滝川 康裕

（内科学講座消化器内科肝臓分野 教授）

・学生等との懇談①

（東研究棟1階SGL教室）

・学生等との懇談②

（西講義実習棟1階講義室）

第2日目

・特別講義Ⅱ

「医療系総合大学としての岩手医科大学の使命」

小川 彰

（理事長・学長）

・総合討論

司会：伊野 美幸

（聖マリアンナ医科大学 教授）

次いで、本学の教育を特徴付けるトピックの紹介に移りました。地域医療教育に関しては、学部教育と卒後教育に分けて、それぞれ平教授（教務委員会教科課程部会長）と黒坂教授（医学研究科教務委員長）が講演をおこないました。また歯学部・薬学部との連携教育の実情を小生が述べ、症例ベースの病態解説教材を使った教育方法について滝川教授（教務委員会試験部会長）が報告をいたしました。あるがままの現状の取り組みと課題および問題点をあげて、その後の討議の論点を明確にしたプレゼンテーションにいたしました。こうした発表はこれまでの視察と討論の会ではなされなかったように思います。



場所を少人数教育用の部屋に移動し、テーマ毎に参加者を4つのグループに分けて、学生を交えた懇談と質疑応答に入りました（スケジュール参照）。学生食堂でおこなわれた懇親会では、懇談に参加した学生と来場された全国の先生方との交流がなされました。また、学生によるさんさ踊りも披露され、学生と教員との距離感が殆どないこと、学部をまたいだ交流がなされていることが、高く評価されたようです。



第2日目は、本学小川理事長・学長による特別講演Ⅱと、前日のテーマで話し合われたことの発表と全体討議がございました。小川理事長・学長の「医療系総合大学としての岩手医科大学の使命」という講演は、本邦の医学教育黎明期から説き起こし、本学創設期の精神を掲げ、震災時はその精神を遺憾なく発揮して対処したことを述べ、更には教育勅語を葬ったことの反省とともに岩手医科大学の道德教育にける情熱を述べられました。圧倒的な迫力で聴衆を魅了した講演であり、文部行政と厚生行政に対する忌憚りの無い辛口の提言も盛込まれたものでありましたが、文部科学省の寺門課長も肯定的な面持ちで聞かれていたのが印象的でした。その後の全体討議は、例年ですといろいろな問題点を厳しく指摘される場であり、どんな批判を受けるか私は戦々恐々としておりましたが、特別講演Ⅱの迫力で毒気を抜かれたためでしょうか、司会の伊野教授（聖マリアンナ医科大学）の手際の良さもあり、スムーズに進行致しました。昼食後、希望者は災害時地域医療支援教育センターの施設見学をしたのち散会致しましたが、同センターの活用に関して様々な御提言を頂きました。



医学教育振興財団 小川 秀興 理事長を囲んで

準備段階では、どうなることかと心穏やかならざるものがありましたが、会を終わってみると、自賛するものも何ですが、客観的に見て他大学でなされたものを凌駕したと評価しております。その最大要因は、本学を特徴付ける「素直な学生達」を披露できたからだと存じます。懇談と懇親の場で、彼らが物怖じせず本学の現状を語って、しかも教員と親しく接している様子を、他大学の先生は羨ましく思っていたようです。「学生こそが本学のかげがえのない宝である」ことを実感した2日間だと思います。なお、開催にあたっては、学務部をはじめ多くの事務の方にご協力を頂きました。大過なく終わったのは皆様のおかげと思います。末筆ながら関係諸氏に深甚なる感謝の意を表したいと思います。

病院対抗球技大会で好成績を収めました

9月7日（日）、盛岡地区23病院による第40回盛岡地区病院対抗球技大会が開催され、本学は、バレーボール、卓球、ソフトボールの3種目に参加しました。

本学チームは例年好成績を収めており、今年も活躍が期待される中、卓球とソフトボールで優勝、バレーボールが3位入賞と輝かしい成績を収めました。また、会場には、多数の教職員が応援に駆けつけ、熱戦を繰り広げる選手たちに声援を送っていました。



卓球チーム



ソフトボールチーム



バレーボールチーム

矢巾キャンパスで東北管区広域緊急援助隊総合訓練が行われました

9月16日（火）から17日（水）の2日間、矢巾キャンパス附属病院移転用地にて、東北6県の警察でつくる東北管区広域緊急援助隊の総合訓練が行われました。



土砂災害を想定した訓練

この訓練は、大規模災害の発生に備え、広域緊急援助隊、緊急災害警備隊、機動警察通信隊、広域警察航空隊、防災関係機関等との合同訓練を実施することにより、各部隊の救出救助技能の向上及び連携強化を図ることを目的に、毎年東北管区警察局長主催で行われているもので、今年度は岩手での開催となり、本学附属病院DMATチームも参加しました。



救護訓練

訓練は岩手県内陸部を震源とするマグニチュード8.8（最大震度7）の巨大地震による県内各地での建物の倒壊や土砂災害を想定し、事前に被災現場の状況、被災者数等を示さない「ブラインド型」で行われました。参加者約450名は緊迫した雰囲気の中、訓練を行い災害時の連携体制の強化を図りました。

創立120周年記念ロゴマーク・スローガンが決定しました

2017年に迎える創立120周年を記念しロゴマーク・スローガンを制定することとして、公募を行ってまいりましたが、このたび最優秀作品及び優秀作品が決定いたしました。今後は、最優秀作品を創立120周年記念ロゴマーク・スローガンとし、記念グッズの製作など事業の旗印として使用していきます。

公募に際しては、全国よりロゴマーク64点・スローガン77点のご応募をいただきました。多数のご応募誠にありがとうございました。



(左から：中村茉莉佳さん、高橋事務局長（望月優さんの代理）、小川理事長、鈴木香織さん、岩本佳幸さん）

にありがとうございました。

10月4日（土）には矢巾キャンパス大堀記念講堂にて、最優秀作品及び優秀作品の表彰式を行い、小川理事長より受賞者へ表彰状と賞金を手渡されました。

また、当日は、記念ロゴマーク・スローガンを活用したバナーフラッグ及びカウントダウンモニュメントが矢巾キャンパスモールに設置され、来るべき120周年へ向け時を刻み始めました。



バナーフラッグ



カウントダウンモニュメント

ロゴマーク

最優秀作品



原作者：望月 優 様（千葉市）

解 説：岩手医科大学で現存する建物で一番古い1号館をモチーフにしました。

優秀作品



原作者：中村 茉莉佳 様（雫石町）

解 説：創立120周年を迎え、歴史開拓へ向け新しいつぼみを実らせる様子を表現しました。三枚の葉は医・歯・薬をイメージしました。

スローガン

最優秀作品

誠のあゆみ、
未来へつなぐ

原作者：鈴木 香織 様（盛岡市）

解 説：岩手医科大学の先人達による輝かしい歴史と、今後に控える120周年記念事業等への希望を表現しました。

優秀作品

120年の想いをつなぎ、
誠の心を医療にこめて

原作者：岩本 佳幸 様（花巻市）

解 説：誠の人間を大学で学び、信頼される医療を目指していきたいとの思いを込めてこのスローガンを作りました。

新任教授の紹介

泌尿器科学講座

小原 航 (おばら わたる)

昭和 47 年 8 月 27 日
岩手県陸前高田市生まれ



①研究テーマ

- ・泌尿器悪性腫瘍の病態解明と新規治療法の確立
- ・腹腔鏡およびロボット手術の発展による低侵襲治療法の開発

②主な著書論文

- ・尿路上皮癌の転移巣切除術 (J Urol 2014; 191: 932-936)
- ・膀胱癌に対するペプチドワクチン療法 (Jpn J Clin Oncol 2012; 42: 591-600)
- ・腎癌の VDR および RXR の発現検討 (J Urol 2007; 14: 483-487)

趣味・特技

(スロー) ジョギング

教職員への自己 PR

診断から治療まですべてを担当するとともに、治療法も内科的治療から外科的治療まで幅広く豊富といった泌尿器科の魅力にひかれ続け、診療・教育・研究を行ってまいりました。高齢化に伴い、医療・社会福祉の面から、泌尿器科の果たす役割がますます大きくなっており、皆様方のご支援をいただければと考えています。母校の発展のため邁進する所存ですので、何卒よろしくお願い申し上げます。

経歴

平成 9 年	岩手医科大学医学部卒業 岩手医科大学泌尿器科入局
平成 13 年	岩手医科大学大学院医学研究科修了 岩手医科大学泌尿器科助手 東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析 センター客員研究員
平成 19 年	岩手医科大学泌尿器科講師
平成 26 年 7 月	現職

睡眠医療学科

櫻井 滋 (さくらい しげる)

昭和 30 年 11 月 18 日
岩手県盛岡市生まれ



①研究テーマ

睡眠呼吸障害および睡眠関連疾患の病態生理と治療法に関する研究、応用行動医学、呼吸器病学、応用呼吸生理(呼吸管理)学、感染制御学(特に医療関連感染および災害時の感染制御)

②主な著書論文

- ・睡眠障害. 知る見る治す. 梅 博久、櫻井 滋 編著. メジカルレビュー社. 東京 (2014.3)
- ・大規模自然災害の被災地における感染制御マネージメントの手引き【第一版】. 日本環境感染学会アドホック委員会「被災地における感染対策に関する検討委員会(委員長)」編. (2014.1)
- ・Sakurai S, Nishijima T ほか. 閉塞性睡眠時無呼吸患者の血漿中オレキシンレベル低値は持続気道陽圧療法により改善する. (Chest;127(3):731-737.2005.)

趣味・特技

写真、絵画、デザイン、散歩や旅行

教職員への自己 PR

岩手県気仙郡の 8 代続く医師の家に生まれ、9 代目を継がず大学におります。本来、美術系志望でしたが金沢医大へ。卒後は母校胸部外科、麻酔科を経て沖縄県立中部病院の呼吸器科・ICU 研修。一旦帰学し、米国シアトルにて集中治療部門の臨床研修。帰国後は呼吸器集中治療部門に勤務。20 年前に本学に赴任し、呼吸器科医・感染制御医として勤務しつつ、呼吸管理の知識を活かして睡眠呼吸障害の領域に。本人は呼吸生理学(換気力学)で首尾一貫のつもりですが、研究者というよりは臨床家で、何でも手を出す器用貧乏タイプです。

経歴

昭和 56 年	金沢医科大学医学部医学科卒
平成 2 年	医学博士 ワシントン大学呼吸器・集中治療医学部門研修 金沢医科大学病院呼吸器集中治療部門副部長
平成 3 年	岩手医科大学医学部第三内科講師
平成 6 年	同 附属病院医療安全管理部感染症対策室長
平成 18 年	岩手医科大学医学部臨床検査医学講座准教授
平成 21 年	同 睡眠医療学科准教授・学科長
平成 22 年	
平成 26 年 7 月	現職

統合基礎講座 医療工学講座

服部 雅之 (はっとり まさゆき)

昭和 44 年 12 月 8 日
愛知県名古屋生まれ



①研究テーマ

チタン合金の歯科応用、金属粉末積層造形による歯科修復物作製、ファイバーポストを応用した支台築造の基礎的研究

②主な著書論文

- ・高耐食チタン合金の機械的性質に及ぼすクロム添加効果 (Dent Mater J, 29:570-574, 2010)
- ・接着修復した破折歯根の耐久性評価
- 支台築造体への繰返し衝撃荷重による影響 - (J J Dent Mater, 32:52-58, 2013)
- ・支台築造用コアレジジンとファイバーポスト複合体の耐久性評価 (Dent Mater J, 29:224-228, 2010)

趣味・特技

スポーツ観戦(主に野球、ラグビー)、ウォーキング、キャンプ

教職員への自己 PR

歯科医療を支える歯科材料・器械は、私が学んだ学生時代と比べると様々な変革がなされています。新しい材料や技術に対応した教育内容の充実、世代に適応したカリキュラムの構築、医療系総合大学の特徴を生かした研究に積極的に取り組んでまいりたいと考えています。ここ東北地方での生活は初めてですが、美しい山々に囲まれた自然豊かで歴史のある盛岡で、教育、研究を通して本学の発展に全力を注いでまいりたいと考えております。よろしくお願い申し上げます。

経歴

平成 6 年	愛知学院大学歯学部卒業
平成 10 年	愛知学院大学大学院歯学研究科修了
平成 10 年	東京歯科大学歯科理工学講座助手
平成 15 年	同 講師
平成 26 年	同 教授
平成 26 年 5 月	現職

《岩手医科大学報編集委員》

小川 彰	菊池 初子
影山 雄太	江刺家和恵
松政 正俊	佐々木さき子
齋野 朝幸	米澤 裕司
小山 薫	佐々木忠司
藤本 康之	畠山 正充
佐藤 仁	大須賀志穂
成田 欣也	武藤千恵子
山尾 寿子	野里三津子

編集後記

今号の表紙およびTopicsにも関連記事を掲載しておりますが、2017年に本学は創立120周年を迎えます。それを記念してロゴマークとスローガンが決定し、矢巾キャンパスではバナーフラッグとカウントダウンモニュメントが設置されています。皆さんも一度足を運び雰囲気を味わってみてはいかがでしょうか？今後も大学報は様々な形で創立120周年を取り上げ、気運を高めていきます。私の方は、秋の夜長、「三田俊次郎先生伝」を紐解きながら岩手医科大学120年の歴史に思いを馳せてみたいと思っています。

(編集委員 米澤 裕司)

岩手医科大学報 第457号

発行年月日 平成26年10月31日

発行者 学長 小川 彰

編集 岩手医科大学報編集委員会

事務局 企画部 企画調整課

盛岡市内丸19-1

TEL 019-651-5111 (内線7023)

FAX 019-624-1231

E-mail: kikaku@j.iwate-med.ac.jp

印刷 河北印刷株式会社

盛岡市本町通2-8-7

TEL 019-623-4256

E-mail: office@kahoku-ipm.jp

病院食 の ご紹介

栄養部より

普段病院食を目にする機会がない方もいらっしゃるのではないでしょうか？

病院食は治療の一環ですが、患者さんにとって食べることは楽しみでもあります。当院では年に20回行事食を取り入れています。また、昨年度は旬の県産食材（わらび、わかめなど）を取り入れ、患者さんからご好評を頂きました。

今回はその中からクリスマスとお正月の行事食をご紹介します。

クリスマスメニュー

ケーキは手作り、
ローストチキンは
クックチルで作りました

MENU

米 飯
クリームスープ
ローストチキン
フレンチサラダ
手作りクリスマスカップケーキ



子供たちには
サンタさん☆

おせち料理

お品書き

赤飯または粥
年越しそば
盛り合わせ
なます・黒豆・栗きんとん
炊き合わせ
水菓子

炊き合わせや
鶏肉二色巻き
はクックチル
で作りました

きざみ食、
すりつぶし食の
患者さんにも

※クックチルとは・・・？

加熱調理した食品を急速冷却し食べる時間に合わせて再加熱し提供する調理システムです。冷凍保存のような食品の劣化がなく、中まで味がよくしみ込み、料理が軟らかく仕上がります。